

諏訪御柱祭にみる地域協働のなかの統合と運営 ——上社湖東地区の慣例と創出のしくみ——¹

小西 恵美・樋口 博美・飯田 義明

はじめに

茅野市、諏訪市、諏訪郡の広域をまとめる諏訪大社上社の御柱祭大祭を見ると、「諏訪の心はひとつ」というメッセージが示すような一体感を感じる。しかし一歩踏み込んでみると、祭りに関わる人々が諏訪全体の一体感を意識しているどころか、自分が所属するブロックや地区以外をライバル視し、他には無関心のこともしばしばである。筆者らは別稿で、御柱祭には氏子たちによって強調される地域的多様性や個別性があることを明らかにした²。そこには御柱祭の作業全般の単位となる区（集落、江戸時代の村）や地区（明治時代の村）の成立過程が関係しており、時には協力的で共同的な、時には競合的な関係が生み出され、これが祭事作業や行事遂行に関わる地域の個性として現れるのである。

しかし、どのようにしてこれらの地域的な多様性と個別性が折り合いをつけ、最終的にはうまく組み合わさられていくのだろうか。御柱祭は長い間、強い共同体の枠組みの中で催行され、継承されてきた。インフォーマルな形でのネットワークの重要性や、技やコツなど目に見えない形での祭り文化の伝承が御柱祭の催行には不可欠であることは容易に想像がつく。しかし現代社会の様々な環境変化の中でそうした慣習や共同体文化が薄れる傾向にあるのは否定できない。それを補完する可能性の一つとしてあげられるのが公的な制度である。例えば、平成 22 年度から上社の各ブロックに「頭郷総代会」が新たに整備され、御柱祭運営を中核的に支える組織として位置づけられた。

とはいえ、公的な制度や組織を一括りに説明できないのが御柱祭である。組織や役職が共通のものであったとしても、それをどのように使うか、どんな人をその役職につけるのか、どのような権限を与えるのかは各ブロックや各地区、そして各区に任されている。また、そうした組織の役職に無作為に人を当てはめても、必ずしもうまく機能するとは限らない。

¹ 本稿は、平成 28 年度専修大学研究助成（共同研究）「伝統的祭礼にみる地域コミュニティの創造的継承—御柱祭と祇園祭の比較研究から—」（小西，樋口）と平成 29 年度専修大学研究助成（個人研究）「祭り」という身体文化と地域社会に関する基礎的研究—諏訪御柱祭を事例として—」（飯田）の研究成果の一部である。

² 小西恵美・樋口博美「御柱祭と成立させる地域的構成の単位とその歴史的変遷—茅野市湖東地区の事例—」『専修大学人文科学研究所月報』292 号、pp.29-49（2018）。

本稿では上社に属する湖東地区を中心に、御柱祭を成立させる様々な組織についての整理を行うが、他地区との比較検討も加えながら、形式的な組織の枠を越えた地域協働の中に、これまで存続してきた伝統や慣例を守ろうとする慣習的な側面と、一方で次世代への存続を可能にしていくための創意工夫を行おうとする創出的な側面があること、この二側面を内包した祭礼のしくみが地域の“個性”や“多様性”として現れることを、特にこれまで筆者たちが行ってきた祭礼関係者への聞き取り内容（主に平成 28 年度の御柱祭の最中からその後 2 年に渡って関係者に聞き取りを続けてきた）からその関係性の詳細を示しつつ考察していく。

1. 御柱祭を成立させる組織——三つのレベル

上社御柱祭大祭を催行するための組織は三つのレベルから構成される。この三つのレベルに該当する地域的範囲、そして実際の祭礼に関わる組織を照らし合わせて示したものが図 1 である。本稿では、図中の で囲んだ「米沢・湖東・北山ブロック」に焦点を当て、その中でも特に「湖東地区」を中心に見ていくことになる。一つ目のレベルは、①上社地区のレベル

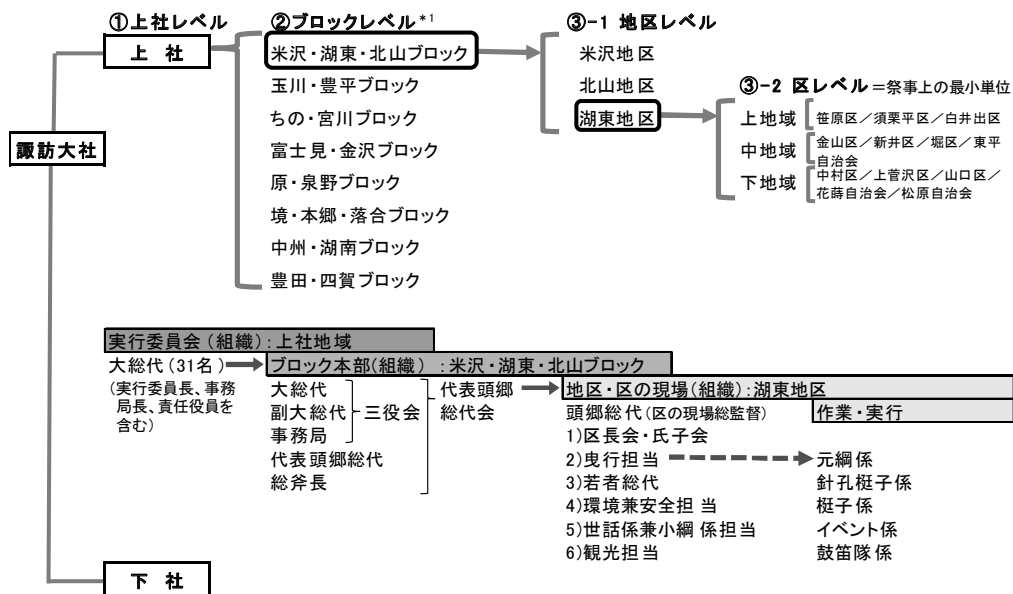


図 1：御柱祭を構成する三つの組織レベル（①上社、②ブロック、③地区・区）
——湖東地区を中心に*2 [筆者作成]

*1 各ブロックにおける地区名は、その年の責任地区が先頭に記述されるようになっている。
*2 この組織図は本稿で対象とする湖東地区に焦点をあてた図である。組織や役割の具体的な名称もすべて湖東地区のあるブロックと湖東地区のものである。

であり、実際の組織としては大総代を頂点とした上社地区全体を統括する「実行委員会」がある。「統括と連携」の機能をもっている。二つ目のレベルは、②ブロックのレベルであり、実際の曳行内容についての運営を決定する「各ブロックの本部組織」がこれに該当する。祭事の遂行においては「統合と運営」の機能をもつ。ちなみに、本稿が対象とする米沢・湖東・北山ブロックには実に22名のメンバーがいる。三つ目のレベルは、③地区・区レベルであり、これらは各地区・各区ごとに現場で組織され、いくつかの係（役割）に分けられる。祭事の際、「作業と実行」が進められる現場を直接監督するのは、頭郷総代である。

ここでは、まずこれらの三つのレベルにある実体的な組織とその組織内の具体的な役職、それらはどのような役割を担っているのかについて見ていくことにする。

1-1 「統括と連携」を目指す実行委員会——上社地域の大総代会

一つ目のレベルにあるのは、上社地区全体を統括する実行委員会（正式名称は「上社御柱祭安全対策実行委員会」）である³。御柱祭は諏訪大社に対する氏子の奉仕から成り立つものであるが、全体の統括をするのはそれらの氏子の総代表である大総代である。大総代とは20万人いるといわれる諏訪地方に居住する諏訪大社の氏子の代表であり、上社側には31名存在するが、これらは上社の18地区それぞれから選出されるものである⁴。ただし、表1にも示されているように、地区ごとに選出される大総代の人数は異なる。どの地区からも必ず1名は選出されるが、ちの、宮川、中洲のように3名の地区もあれば、湖南や玉川のように2名の地区もある。しかし、地区による人数差にかかわらず、すべての大総代が実行委員会の構成員となる。

実行委員会を率いるのは大総代31名の中から選出された実行委員長と、さらにそこからもう1名選出される事務局長であるが、これは経験や行動力が問われる役職である。また、御柱祭で起きる色々なトラブルへの対応のために責任役員も大総代の中から決められるが、慣例で、本宮や前宮、柱の曳行路にあたる御柱街道沿いの地区（原、玉川、宮川、ちの、中洲）を中心に、その他湖南と富士見から1名ずつが任命されることになっている。これは、御柱街道沿いの地域の顔役である大総代だと、曳行中に起きる問題に関する住民との折衝や、曳行に夢中になるあまりに問題を起こしやすい若い男性たちのコントロールが比較的スムーズにしやすいことも一因である。委員長と事務局長、責任役員も含め、実行委員会は曳行部会と環境部会に分けられ、すべての大総代がどちらかの部会に所属しながら、8つのブロック間の連携をとり、諏訪大社宮司も一緒になって、全体調整を行っていく。実行委員会は、御柱祭の日程や全体と

³ 下社では下諏訪、岡谷、上諏訪の間で三地区連絡協議会を置き、諏訪大社大総代会が御柱祭の催行を仕切る形になる。

⁴ 下社の大総代的人数は38名と、上社より多くなっている。

表 1 : 上社大総代の地区別・ブロック別人数

ブロック	地区	責任大総代選出地区	地区別人数	ブロック別人数
1	中洲	○	3	5
	湖南	○	2	
2	豊田		2	4
	四賀		2	
3	ちの	○	3	6
	宮川	○	3	
4	玉川	○	2	3
	豊平		1	
5	米沢		1	3
	湖東		1	
	北山		1	
6	原	○	3	4
	泉野		1	
7	富士見	○	1	2
	金澤		1	
8	境		1	4
	本郷		2	
	落合		1	
		7 地区	31 名	31 名

してのやり方を決め、それを地区の連合である各ブロックに下ろしていく組織である。御柱の候補となる 8 本の柱を探し、必要に応じて伐採の交渉や調整を行うことから、柱の割当てを決めるための抽籤会の準備、祭り当日の進行まで、すべての流れを担当する。

実行委員会の正式名称「上社御柱祭安全対策実行委員会」からもわかるように、とりわけ重視される点はいかに祭りを安全に遂行するかである。以前は「氏子の祭り」「内輪の祭り」という側面が強く、死人やケガ人が出るのが当たり前で、「ケガと弁当は自分もち」と言われるような荒っぽい祭りであった。しかし近年、その是非の議論はあるものの、観光化の進行や外部団体から注目されることも多くなる中、とりわけ安全が求められるようになってきた。巨木の伐採や、急傾斜地や川を含む長距離の柱の曳行、建御柱には大きな危険を伴うし、沿道に繰り出す相当数の氏子や観光客のことを考えると、何を差し置いても重要なのは安全性であろう。さらには、何か事故が起きると、諏訪大社の名声も傷つくことになる。したがって、氏子代表の大総代が前面に出て、神社を氏子として守るために、「安全対策」という名前を入れて御柱祭を行うのである。平成 28 年度の御柱祭では、平成 22 年度の問題点を反省し、メドの長さを 6 メー

トル以下に厳しく制限をし⁵、夜間の曳行・川越し⁶を回避するために、曳行時間を厳格に守らせ⁷、建御柱で柱に組みつく氏子の安全带・ロープの着用を義務化したこと⁸などがその活動例である。

しかし、各地区の慣習や決定が強い影響力をもつ御柱祭において、大総代を構成員とするこの実行委員会はあくまでも各ブロック間の全体調整機関でしかなく、個々のブロックの決定に対しては強制力をもつわけではない。一例をあげると、平成 22 年度の大祭では慣例を覆し、2 つのブロックが組織的に曳き子に観光客を動員する決定をした。しかし、観光客の動員に対し、氏子の奉仕という精神を理解しない観光客が、安全に、氏子と力を合わせて曳くことは難しいだろうと実行委員会では強い反対があがった。結局のところ、金沢・富士見ブロックはこの計画を中止したものの、北山・米沢・湖東ブロックは決行した。山間部に位置する北山地区は古くからの観光地を含み、御柱祭期間中の観光客を誘致したいホテルや旅館が蓼科区や白樺湖自治区などに立地することもあり、この試みをあらためて支持したのである。平成 28 年度もこのブロックは引き続き観光客の曳行を認めている。

1-2 「統合と運営」を担うブロック本部——米沢・湖東・北山ブロックの三役会と 代表頭郷総代会

御柱祭を催行する組織の二つ目のレベルは、実際の曳行内容についての決定および運営を行っていく組織であり、各ブロックの本部組織がそれにあたる。これに関しては上社のブロックや地区共通の組織があるわけでない。また、同じ役職名であっても、実際の仕事の内容や権限はブロック・地区ごとに異なるし、指示系統も違う。ここでは、米沢・湖東・北山ブロックを事例に、その中でも特に湖東地区を中心に見ていくことにする。

米沢・湖東・北山ブロックでは、本部組織を構成するメンバーとして、大総代（3名）、副大総代（4名）、事務局（3名）、代表頭郷総代（11名）、総斧長（1名）の計 22 名が配置される。本部役員の 22 名は地区を代表する者たちであるが、三地区のうちの一地区は当番地区として、すべての役職においてとりまとめを行う。平成 28 年度は米沢が当番地区であり、大総代の代

⁵ メドを長くすると多くの人が柱に組みつくことが可能になり、見栄えも立派になるが、その分、事故を起こす危険性も増す。平成 22 年度の御柱祭でもメドの長さは決められていたが、それにもかかわらず徹底されず長さを超過するメドが使われたことを受け、平成 28 年度は実行委員会が当日採寸を行った。

⁶ 山出しの難所で、木落としとともに、最大の見せ場の一つである。前メドに若い氏子を乗せて、冷たい雪だけ水が流れる宮川に御柱は飛び込む。

⁷ 曳行中に余興を過度に行うことで予定時間が遅れると、あとから出発をした柱に影響を及ぼすことになる。平成 22 年度は大幅な曳行の遅れが生じ、最後の柱の川越しが夜間に突入し、暗く寒い中、光源をもつての川越しとなった。

⁸ 平成 22 年度の下社秋宮の建御柱で、柱を支えていたワイヤーが切れたことでバランスを崩し、命綱をかけていなかった氏子が落下事故で死亡した。

表、副大総代の代表、代表頭郷総代の代表、そして斧取りの代表の総斧長はすべて米沢地区の者になった⁹。

本部組織は、さらに計画立案セッションである三役会と、三役会の立案を決定するセッションである代表頭郷総代会の2つに分かれる。中核をなすのは、大総代、副大総代、事務局の三役であり、最終的な責任を担う。他地区では、境・本郷・落合ブロックのように前大総代を中心とする大総代経験者を顧問として任命し、係長経験者を相談役とするようなところもあるが¹⁰、米沢・湖東・北山ブロックではそのような役職を設けていない。このブロックではどの地区も大総代は1名ずつであり、計3名しかおらず、それに加え、副大総代は米沢から2名¹¹、湖東と北山からは各1名ずつ選出される。副大総代という役職は、大総代のような諏訪大社の正式な氏子組織ではなく、すべてのブロックにあるわけでないが、大総代の業務を補佐する役目を担っている¹²。一方、事務局は、基本的には会議や打ち合わせの連絡や準備等を行う役職であるが、米沢・湖東・北山ブロックの場合、もう少し踏み込んで大総代を補佐する役目ももっている。いわゆる「本部長」という役職がこのブロックにはないので、その役目も一部兼ねることになるが、実際の段取りを進めていく事務局は御柱祭の成功を大きく左右するといっても過言ではない。昭和30年の町村合併で湖東村が廃止され、茅野町、その後茅野市になって以来、旧村の湖東には出張所（コミュニティセンター）が設置され、その所長である、いわゆる「村長」が事務局の職務に就くことは慣例として受け継がれてきた。長い間、所長職に就任したのは、その地区出身のいわゆる「退職所長」と呼ばれる現役を退職した臨時職員であり、市役所における部長や課長経験者が再任用され「村長」業務をこなしてきた。御柱祭は、「村長」業務において、大きな責任のある、ある意味、一番重みのある仕事であった。

次に、本部組織の立案決定セッションである代表頭郷総代会に目を向けてみる。本部には三役に加え、11名（湖東と北山は3名ずつ、米沢は5名）の代表頭郷総代がいる¹³。各区から出てくる頭郷総代の中から、湖東と北山では3名ずつを、米沢では5名を選び代表頭郷総代とし、上記の三役と総斧長を合わせ代表頭郷総代会を構成するが、この組織の歴史は新しく、平成22年度にはじめてできたものである。上社では、平成16年度に御柱祭のための役職として頭郷総代を立てることになり、御柱祭時には氏子を代表する頭郷総代が各区で1名ずつ選出されることになった¹⁴。しかし、平成16年度は御柱祭の直前の12月に頭郷総代は任命されたことから

⁹ 当番地区は、平成16年度は湖東、平成22年度は北山であった。次回は湖東が当番となる。

¹⁰ 補論で触れるが、中州・湖南ブロックの相談役には現職の市議会議員が就く。

¹¹ 米沢は地区の方針で副大総代はいつでも2名選任し、片方は会計を担当している。

¹² 他にも、豊平地区には副大総代がいるが、中洲、湖南、富士見などは置いていない。

¹³ 代表頭郷総代の定員は本部で決めているわけではなく、数の違いはそれぞれの地区のとりきめによる。

¹⁴ 北山では平成16年度は結局、頭郷総代は出さなかったが、平成22年度からは必ず出すよう申し送りをした。

も明らかなように、少なくとも米沢・湖東・北山ブロックではあくまでも形の上で設置しただけであり、何かの権限をもっているものではなかった。このブロックにおいて、頭郷総代に実質的な新たな役割を与えるようになったのは平成 22 年度以降である¹⁵。大総代に集中していた責任と権限を分散させるために、頭郷総代の一部の者を代表頭郷総代として、本部構成員に昇格させたのである。「区のもの」であった頭郷総代が、「地区のもの」になったとも考えられる。それまでは大総代から地区・区へのトップダウンの傾向が強かったが、頻繁に代表頭郷総代会を開き、三役会からの提案を確認・議論し、さらに決定した内容を地区の頭郷総代会に伝達し、区ごとの役員の割当てを決定する役目を担うようになった。また頭郷総代の選出の時期も 1 年前倒しし、本番の 1 年以上前までに公的に決定することになった。

1-3 「作業と実行」を遂行する地区・区の現場——湖東地区の頭郷総代会と各作業担当係

御柱祭運営のための三つ目のレベルの組織は、本部の外側にある、各地区・各区の運営組織である。ここが実際の作業を担う現場を直接監督することになる。米沢・湖東・北山ブロックの大きな特徴は、本部組織の構成員は大総代、副大総代、事務局の三役と代表頭郷総代と総弁長だけであり、現場の作業担当長が入らないことがあげられる。

既述のように、本部で決定された事項のほとんどは、代表頭郷総代によって各地区頭郷総代会に伝えられ、そこで作業を担当する責任者を決めるが、大きく (1) 区長会・氏子会、(2) 曳行担当、(3) 若者総代、(4) 環境兼安全担当、(5) 世話係兼小綱係担当、(6) 観光担当という 6 つに分けられる。観光担当以外は、どれも古くからある担当である。代表頭郷総代はそれぞれの担当に「相談役」として入るが、それとは別に正副担当長が各地区から選ばれ、さらにその下に担当者が割り振られる¹⁶。少し前までは地域における慣習的な勢力構図が色濃く残っていて、華やかで目立つ役職を親村が独占することもあったが、近年は区ごとの偏りをなくした平等な人数配分が見られる¹⁷。

各区における「祭りの大将」もしくは「現場の総監督」は頭郷総代であるが、日常生活上の区の行政は区長が、祭事は氏子総代が行っている。したがって、頭郷総代は費用の負担や御柱祭の作業分担などに関するブロック本部からの指示を、まずは区長に伝え、そこから区民に依

¹⁵ 平成 22 年度以降、どのブロック・地区からも頭郷総代を出しているが、頭郷総代の仕事の内容や組織における位置づけは、各ブロック・地区に任せられているため、それぞれが異なる。

¹⁶ 担当長は責任地区の米沢から、副担当長はそれ以外の湖東と米沢から選ぶ。

¹⁷ 他地区では、例えば富士見地区は、かつて御柱祭用の人足を出せない部落が多い中、神戸だけで柱を曳行して以来、御柱祭は神戸がやるものとなり、針孔梃子係も神戸が独占し続けた。しかし平成 16 年度に全区に針孔梃子係を開放し、富士見全体で分担するようになっていく。豊平でも、かつては親村である南大塩が主要な役職をほぼ独占していたが、平成 22 年度にはじめて、完全世襲・慣習的選出から各部落代表内での話し合いの形をとり「おんばしら気質」の強い若者、すなわち諏訪大社への奉仕の精神のある者を抜擢するようになった。

頼や指示を出してもらおう形をとる。その意味では区長会や氏子会は区レベルの本部組織ともいえる¹⁸。

しかし、区の分担の中で最大の人数が割り当てられるのは曳行担当である。御柱祭の最も華やかな部分を担う若手中心のセクションであるが、これはさらに、(1) 元綱係、(2) 針孔梃子係、(3) 梃子係、(4) イベント係、(5) 鼓笛隊係の5つの係に分かれる。柱と曳綱を結びつける場所周辺は御柱の曳行の中核部分であり、そこを仕切る者が曳行の隊列に関する指示を出す。そこを担当するのが元綱係である。元綱係と一緒に曳行の先頭に立ち柱を動かす作業の担当は針孔梃子係や梃子係であるが、このあたりの花形ポジションは若い男性氏子のあこがれの役割となっている。また、かなりの力と体力を必要とすることも事実であり、御柱祭に参加する若者男性の多くが元綱、針孔梃子、梃子係に集中している。イベント係は木落とし¹⁹や川越し、建御柱の際に行うイベントの企画を担当し、鼓笛隊はそうしたイベントをラップ等で盛り上げるが、これらは比較的新しい係である。イベント係はこのブロックの伝統的な係ではなく、「三友会」という平成16年度の御柱祭で存在を示すようになった米沢、湖東、北山の三地区の若者が、地区を越えて御柱祭遂行のために組織した団体²⁰によって新たに作り出されたものであるが、少なくとも平成28年度御柱祭では地区の正式な担当の係として置かれることになった。

上記は各地区頭郷総代会の下に置かれた係であるが、それとは独立した重要なセクションに斧方がある。既述のとおり、本部役員の一員として総斧長が入っているが、総斧長は代表頭郷総代会のメンバーではあるものの、頭郷総代からは完全に独立し、地区レベルでも総斧長の下には独立した斧方会が置かれ、その他の担当からはこちらも独立している。かつての斧長は大総代と並び絶対的な力を地区の中で保持していた。重機がない時代、山から木を伐採し、材木を扱えるのは唯一木こり、すなわち斧取りしかおらず、「ものを言える人」として力をもっていたのである。そのうち大工が斧取りになったが、それでも御柱祭において一番の実力者ともいえるポジションであり、木を作るだけでなく柱全体に指示を出しており、斧方だけでなく、曳行時に柱にはりつく元綱や梃子衆たち若者も統率していた。しかし、先に述べた「三友会」の設立も一因となり、次第に斧方は他の係から独立していったのである。湖東の場合、斧方は上・中・下地域から各々2名ずつと、それに見習いの3名を含め、計9名が斧方として木作りを担

¹⁸ 政教分離の観点からしても、区長という区の行政の長を祭礼の長に据えることは避けるべきであり、頭郷総代と区長との分離は都合がよかった。

¹⁹ 山出しの難所で、川越しとともに、最大の見せ場の一つである。前後のめどに多くの若い氏子を乗せて、御柱は傾斜27度の木落とし坂を一気に下る。

²⁰ 三友会については、小西恵美「伝統行事を通じた地域コミュニティの形成—諏訪御柱祭の一事例—」専修大学社会知性開発研究センター・社会関係資本研究センター『社会関係資本研究論集』第5号、pp.126-26 (2014) を参照。

当する²¹。斧方に加え、さらに忘れてはならないものが、消防分団と、子ども木遣りを含む木遣り保存会である。これらは本部機能の外側に、三地区三役会に直属する形で置かれている。

こうした担当に関しては、どこの地区においても類似の係が見られる。木を伐採し、曳行できるように加工し、区で打った綱を木に装着し、曳行し、最終的に柱を建てるというプロセスはどのブロックも地区も同じであり、作業としては共通のものが多い。しかし指示系統に着目すると、ブロックごとの特殊性が観察される。一例をあげると、米沢・湖東・北山ブロックでは、斧方は輪なぐりや元綱周辺の木の加工作業を担当するにもかかわらず、元綱や追いかけ綱などを扱う担当とは分離しているのに対し、補論で扱う中州・湖南ブロックでは、それらは斧長の統率下にある。こうした指示系統はそれぞれのブロックの伝統や慣習に基づくものであり、さらに詳細に比較することで地区の独自性が見えてくる。

ここで、これまでの説明を、平成 28 年度の御柱祭の際の米沢・湖東・北山のブロック本部以下の組織内容として整理したものが図 2 である。

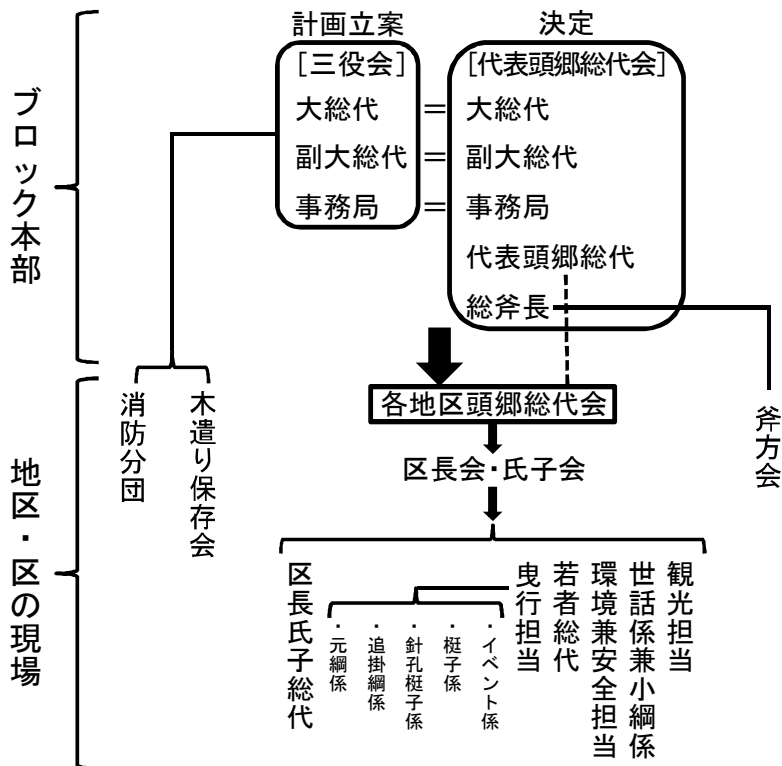


図 2：平成 28 年度米沢・湖東・北山ブロックの御柱祭組織図 [筆者作成]

²¹ 下地域に関しては、斧方は必ず中村から 2 名出すことが慣例となっており、山口と上菅沢からは選出しない。上地域は笹原と須栗平から 1 名ずつ、中地域は堀と新井から 1 名ずつ選出する。

2. 御柱祭における「統合と運営」の地域的慣習と創出

ここでは、1章で見てきた組織のレベルのうち、指示システムのトップであり、祭礼の際のすべてを統括して責任を負う「大総代」と、実際に切り回していく「事務局」に焦点を当て、祭礼にあたって（準備も含めて）、どのような人たちがどのようにその役割をこなすのか、聞き取り事例も用いながら考察を加える。

1章で整理した三つのレベルのうち、大総代を頂点とした1のレベル〔上社地区レベル：統括と連携〕と、これも大総代を筆頭とした三役会と代表頭郷総代によって構成される2のレベル〔ブロックレベル：統合と運営〕における彼らの役割とその機能を見ることによって、どのように祭礼が立ち上がり、引き起こされていくのか、地域における慣習的、創出的特徴はどのようなものかを析出し、祭礼統括のしくみを考察する。

2-1 御柱祭のなかの大総代

(1) 大総代の本来的役割と諏訪大社との関係

大総代は御柱祭の顔と言っても過言ではない。先にも記したように、大総代とは、20万人いられると言われる諏訪地方に居住する諏訪大社の氏子の代表であり、御柱祭における地区の総責任者という位置づけであるが、本来その役職は御柱祭に限定されるわけでない。大総代の本来の役割は、毎月開催される大総代会や、御田植祭、御船祭、御射山祭といった大社の毎年の神事や小宮祭関連行事への出席をはじめとする諏訪大社への奉仕であり、地元の氏子の要望を大社側に伝えるものである。したがって、御柱祭への関与は、諏訪大社における多々ある役割の一つにすぎない。しかしながら御柱祭では、その神事としての規模の大きさや重要性により、大総代は通常とは異なる役割を求められることになる。

(2) 大総代のブロック・地区内での役割

各ブロック・各地区における大総代の役割は、まず、三役会を招集し、諏訪大社及び関係方面との打ち合わせ事項等を報告し、ブロックにおける計画を立てることである。また、曳行時においては、次に見ていく頭郷総代と連絡を取り合い、何か問題が生じた場合はその対応に努めるものである。

大総代と副大総代の選出の仕方は、同じブロックの中でも、地区ごとに異なる。湖東地区の場合、大総代と副大総代の任期は3年であるが、副大総代は大総代の見習い期間の位置づけにあり、副大総代の任期3年のあとに大総代を3年務めることが慣例になっている。湖東では6年ごとの御柱祭開催とその準備期間を考慮して任期が定められており、大総代職の3年目に御

柱年が来ることで、任期の最中に引継ぎをしなくても済むようになって²²。湖東地区は、慣習的に上・中・下地域に分かれているが、大総代と副大総代職は各地域に順番に回していき、その選出も各地域に任されている。

一方、同じブロックでも北山地区の場合、大総代の任期は平成2年以降、3年間となり、北山の6つの区・自治会（柏原、蓼科、糸萱、湯川、芹ヶ沢、白樺湖）がもち回りで大総代を出す²³。任期は原則、御柱年の前年度の1月からとなっている。しかし、副大総代という役職は通常置かず、御柱祭の直前に任命する²⁴。他方、米沢もまた、通常は副大総代がいないが、御柱祭の前になると2名が選出され、片方は総務の仕事、片方は会計業務を担当する。また、米沢、北山ともに、副大総代は大総代と同じ区から選出される。

(3) 大総代 TK 氏の事例

以下に、平成28年度の御柱祭で大総代を務めたTK氏を取り上げ、その経歴と経験から大総代の地域や祭りにおける役割について見ていく。事例は、①地域における経歴（地域との関わり方や立場）、②御柱祭における経歴（これまでの御柱祭との関わり方、役割、経験）、③役割決定の経緯、④平成28年度御柱祭での実際の役割、向き合い方、という4つの観点から考察し、御柱祭がどのような人々によってまとめ上げられていくのか見ていく。

大総代 TK 氏（60代後半、蕎麦店経営、男性）：平成28年度湖東地区大総代

①地域における経歴：地域との関わり方

湖東地区須栗平区出身。父親は須栗平の木こりで、その周辺の木こりが所属する山ノ神講のメンバーで、御柱祭における斧方も経験している“おんばしら”一家で育つ。高校卒業後、電力会社に勤め電気工事を請け負っていたが、後に独立して建設会社を創設した。しかし脳梗塞をきっかけに建設会社は息子に譲り、その後、蕎麦栽培と蕎麦店経営を始めた。年々増える休耕田を借り上げて蕎麦畑にし、自家製粉した100%地元産の蕎麦粉を販売する一方で、地元の人々が気軽に集まりおしゃべりができるコミュニティセンター的存在を目指し、蕎麦店も経営している。

²² 他地区で副大総代職があるところは豊平である。豊平の大総代は、古くから、必ず南大塩区から選出されることになっており、それもかつての「村長」や議員の家系の者が就くことが慣例となっている。他方、副大総代を決めるのは大総代であり、仕事のパートナーとしてやりやすい人を任命する。

²³ 白樺湖は独立した区から自治会に格下げし各種負担を少なくした関係で、大総代は2順で1回くらいを回すようにしている。

²⁴ かつては御柱祭前になるとどの地区でも副大総代が任命されていたが、最近では副大総代を置かない地区も多くなってきた。

②御柱祭における経歴：これまでの御柱祭との関わり方

御柱祭には、子どもの頃から曳き子として参加していたが、本格的に現場作業に携わったのは20歳の時からである²⁵。以来、全部で9回、様々な立場で御柱祭に関わってきた。昭和43年度と49年度（20歳と26歳）は梃子係として先輩の指示に従い、曳行を支えた。昭和55年度（32歳）の御柱祭ではメドの上から4番目に乗ったが、この時の御柱祭では、ちょうど義理の兄が抽籤総代になったこともあり、そのことがメドに乗せてもらう後押しとなった。



写真1：メドに乗る



写真2：山出しの始まり、大総代（中央）とメドに鈴なりに乗る若者たち

昭和61年度と平成4年度（38歳と44歳）の御柱祭ではそれまでとは役割が変わり、今度は湖東地区の上地域選出の斧方として御柱祭に参加した。すでに建設業を営み、木の扱いには慣れている上に、前述のように父親も斧方であったことから、山ノ神講のメンバーの資格も十分に満たしていた。平成4年度は斧方を務めながら、はじめて建御柱の建方を請け負い、本宮四の柱を建てた。建御柱は氏子の奉仕の側面が強く、建て方報酬はわずかであり、引き受け手を見つけるのはなかなか難しい。電力会社勤務時代に電柱などを建てることには慣れていたもので、命綱の使い方もわかっているし、建て方も応用できるだろうと、建御柱の経験もなく引き受けたが、岡谷の建方経験者に色々と教わりながら任務を全うした。しかし、氏子の奉仕精神を発揮して建御柱を引き受けたものの、周囲からの祝儀を差し引いても大きな赤字となった。平成10年度（50歳）は、北山地区で建御柱を引き受けた業者の全面的な支援に回り、前宮二の柱を建てた。平成16年度（56歳）は副大総代として、御柱祭に臨んだ。その時の大総代は、地区

²⁵ 諏訪の人たちは御柱祭大祭には曳き子として小さい頃から参加はするが、本格的に関わるのは、一般的には「御柱保険」に入ることが可能になる高校卒業後である。これは諏訪全部に共通のことであり、聞き取りでも多くの場合、本格的な祭りへの参加が高校以後であるのはこのような理由からである。

の重要な役職を歴任してきたが、御柱祭の現場での経験は豊富ではなかったことから、KT氏は若者総代との連絡や技術の指導など、現場とのやり取りや仕切りなど実質的な作業の指示の部分を積極的に担った²⁶。御柱祭明けの57～59歳の時、大総代を務めたが、脳梗塞で倒れたのもこの期間である。御柱祭の現場からの引退を決意し、建設会社も息子に譲り、平成22年度（62歳）の御柱祭は区の役員である世話係として迎えた。

③大総代に決まった経緯

しかし、思いがけなく二度目の大総代の役職を引き受けるチャンスが来た。前任の大総代が任期途中で続けられなくなり、そこで白羽の矢が立ったのが、副大総代・大総代の経験者であるKT氏であった。急遽の要請であったため、自分で良いものか同じブロックの他の大総代に相談したところ「若い連中から人望のあるあんたならよい」と言われたことが引き受ける際の後押しの一つとなったという。湖東では大総代になるためには、原則、副大総代で経験を積むことになっているが、KT氏は副大総代（平成14～16年）と大総代（平成17～19年）を経験済みであり、その条件をすでにクリアしていた。結果、湖東では大総代を2回務めることは極めて異例なことであるが、平成28年度（68歳）の御柱祭は湖東地区大総代として本番を迎えた²⁷。

④大総代の御柱祭での役割、KT氏の向き合い方

a. 統合させるまとめ役

大総代の一番の役割はまとめ役・調整役であるとKT氏は言い切る。米沢・湖東・北山ブロックは決して一枚岩でないし、湖東の中でも上地域・中地域・下地域は慣習が違ふといわれるし、11区がそれぞれのやり方をもつ。こうしたブロック間、地区間、地域間の調整を行うのが大総代であるが、地域における複雑な関係性をまとめコンセンサスをとるためには、長い間積み重ねてきた経験や伝統から大きくはずれることなく進めていくことが肝心である。社会環境が変化する中で、技術やしきたりなどの伝統を継承するには大きな努力が必要であるが、1本の御柱の曳行と建立を成功させるためには、それぞれの集団が抱える異なる歴史的背景や慣習をまとめる「伝統の枠組み」に沿わなくてはならないと考えている。

b. 年齢に応じた役割

「御柱祭では、年齢に応じた役割がある」とKT氏はよく言う。若い時はがむしやりに木には

²⁶ 平成16年度はまだ頭郷総代は実質的に機能しておらず、現場の統率は大総代を中心とする三役に任されていた。

²⁷ 一度目の大総代の時は、御柱年をはさまない3年間で任期であったため、御柱年大総代としては平成28年度がはじめてである。

りつく花形ポジションに固執するものだが、ある年齢になったら後進に譲り、自らは後進を育てつつ、次の役割に行くものである。その順番に沿って、梶子係、針孔梶子係、斧方、建御柱、区の役員と経験を積んできた KT 氏は、大総代として御柱祭を「統合し、運営する」立場になった時、現場にも実質的な指示を出すことができ、そのことが若者からの人望を集めることにつながった。

c. 伝統的慣習の維持と“境界”の見極め

伝統を守る必要のある一方で、中にはこれまでの慣習を打破しようと試みる者も出てくる。とりわけ世代間の意識のズレが露見することは多く、若者が求める革新と伝統との間でのせめぎ合いが起きるが、それをいかに抑えていくかが大総代の腕の見せ所である。メドや元綱などを担う若者たちは、柱を動かすという点において絶対不可欠な存在であるが、彼らのやりたいようにやらせると、ともすれば伝統が崩れがちである。ここまでは認め、ここからは妥協させるという線引きは大総代に委ねられるが、若い頃から御柱祭の様々な現場を踏んできた KT 氏は、そういう時に自らの実体験をもとに若者と対話できる強みを持っている。

d. 革新的創出と折り合い

伝統を重視するとはいえ、KT 氏は決して新しいものや新しいやり方を否定したり、受け入れないというわけではない。実際、KT 氏は若い頃、当時勢力を張って三地区を仕切ろうとしていた米沢の一集団「は組」の体制に真っ向から立ち向かってメドの取り合いをし、新しい体制を作ったこともある。2 本の前メドの間にワイヤーを張って、そこにメッセージ付きの垂れ幕を張るのは、今ではどのブロックでも普通に見られるようになったが、これを創意工夫で最初に創出、実践し「革新」を起こしたのは KT 氏たちであった。だからこそ、革新の必要性は認められているものの、調整役の大総代となった今では、伝統的慣習の枠組みの中で、調整をしていくのが望ましいと考えている。「革新的組織」として認識されている三友会との関係も、平成 28 年度御柱祭では、大総代として真っ向から否定するのではなく、本部の言うことを聞いてその枠組みの中でやってくれば、彼らに協力することはやぶさかではないとして、妥協点を図ることも試みている。

立場や考え方の違う人たちとの妥協点を探し、理解し合うために心がけているのは、できるだけ多くの直会に参加するということである。いわゆる「飲みニュケーション」が大事である。



写真3：副大総代、代表頭郷総代、頭郷総代と談笑する大総代（中央）



写真4：山出しを終えて挨拶する、米沢・湖東・北山の大総代たち（一番左がKT氏）

(4) 事例のまとめ：組織慣習のなかの大総代による統合

ここで見てくることは、まず、祭りのもつ伝統的な要素に対する向き合い方は、同じ個人にとっても年齢が上がるにつれて、様々な経験が積まれる中で、考え方や態度に変化が現れるということである。ゆえに世代や年代によって祭りへの向き合い方（の態度）が異なるのはもちろんのこと、個々人の中でも異なっている祭礼への態度を一つの祭りにまとめていくことが大総代の役割である。その際、その判断基準となるのがこれまでの祭りでの自らの経験である。先に「大総代は御柱祭の顔である」と述べた。だが、諏訪の大総代の役割は、本来的には御柱祭に限定されるものではない。そのような大社を頂点とした様々な約束事や伝統的慣習の中での自らの地域の位置づけと役割を了解し、他方でブロックや地区・区の中での役割を把握する

必要があった。大総代自身の中で培われた慣習的規準によって自らの地区のあり方と進め方を（時には無意識に）見極めるのであり、そのことが葛藤を克服し、折り合いをつけつつ組織を「統合」していくことへとつながり、大総代をはじめとする統合組織が規律をもって祭礼をまとめ上げていくことになる。KT氏にとって「自分のやりたい御柱祭は別にある」。でも、「伝統とのせめぎ合いの中で（自らも）“受け容れる”」のである。

2-2 大総代の補佐と運営の段取り

ここでは、三地区からなるブロックで、また各地区で常に大総代を補佐する事務局の存在とその役割について見ていく。組織における他の役職者と異なり、氏子としての立場とは異なる、ある意味「公的」な立場での祭礼参加者である。祭りを遂行する上でその存在はどのような影響を及ぼしているのだろうか。

(1) 地区における事務局の位置づけ

先に、1-2で旧村の出張所（コミュニティセンター）の所長である「村長」が事務局の職務に就くことが慣例となってきたことを述べた。しかし、平成22年度の御柱祭後、市の体制が大きく変化し、それによって①コミュニティセンター所長と所員への現役市職員の配置、②政教分離の公言、が行われた。したがって、地域のコミュニティのみならず、茅野市に関わる業務が増え、コミュニティセンターの職員も「村長業務」だけを行っているわけにはいなくなった。現役市の職員の人事は、当然、御柱祭が念頭にあるわけではなく、出身地区や御柱祭への興味や経験を考慮することなく行われる。そしてこのことが御柱祭の事務局業務に大きな影響を与えてしまうことがある。慣例に沿ってセンター所長は御柱祭事務局に就くものの、政教分離徹底の考え方も加わり、「公的な仕事」として御柱祭に関わることができなくなり、業務外で「一氏子として」職務を行わざるを得なくなったのである。すなわち、完全なボランティア精神に基づく活動であり、職員にその義務はないとさえ言える²⁸。しかし、また新しい体制下での人事が御柱祭を一切考慮せず、杓子定規に行われたというわけではない。茅野市の職員は市外出身者も多いが、できる限り所長は地区出身者をあてるような考慮はなされている。選出に地区の意志が大きく反映される大総代・副大総代とは異なり、市の新たな体制下で任命される事務局は、40歳代前半くらいで比較的若く、地区の氏子からの信認を得やすいとはいえない。しかし、平成28年度の湖東地区ではこうした難しい状況下でうまく事務局が機能した。その事例を次

²⁸ 実際、茅野市のある地区のコミュニティセンター所長は「個人として」まで御柱祭に力を注ぎたくないということで、あまり御柱祭に関与せず、運営に影響が出てきた。そのため御柱祭の前に新しい所長と交替した。

に見ていく。

(2) 事務局 SM 氏の事例

以下に、平成 28 年度の御柱祭で事務局を務めた SM 氏を取り上げ、その経歴と経験から事務局の地域や祭りにおける役割、ひいては公的な立場の者がどのように祭礼に関わるのかを見ていく。ここでの事例は、①地域における経歴（地域との関わり方や立場）、②御柱祭における経歴（これまでの御柱祭との関わり方、役割、経験）、③役割決定の経緯、④事務局の実質的な役割と祭りとの関係、の 4 つの観点から考察する。

事務局 SM 氏（40 代後半、茅野市職員、男性）：平成 28 年度湖東地区事務局

①地域における経歴：地域との関わり方

湖東地区中村区出身。高校までは地元で育ったが、大学時代は地元を離れた。大学卒業後に中村に戻り、茅野市役所に就職し、現在に至る。小宮の例祭や小宮祭など、中村区の行事には積極的に参加をする一方で、消防団にも 10 年所属した。平成 24 年（43 歳）の時に区長代理も務めている。

②御柱祭における経歴：これまでの御柱祭との関わり方

SM 氏の祖父は、長いこと斧取を務めていた。諏訪に生まれると、どの家にも何かしらの御柱祭との関わりがあるとも言われるが、SM 氏も例外でない。しかし父親は仕事の関係で家を離れることが多かったため御柱祭にはりつくことはできず、SM 氏が子どもの頃は、御柱祭ととりたてて深いつながりをもつ家庭環境であったわけではない。それでも SM 氏は兄弟ともに御柱祭に興味をもち、「木遣りの声を聞くと、血が騒ぎ」、成人したあとは積極的に祭りに参加していくことになった。

SM 氏の場合、大学時代は地元におらず、成人後の最初の御柱祭である平成 4 年度（23 歳）は、単なる「曳き子」としての参加であった。何年も前から準備を行う御柱祭において、大学卒業後の翌年に本番を迎える御柱祭で、責任のある担当を任されることは無理な話であった。しかし平成 10 年度（29 歳）は針孔梃子係に就き、メド作りからその扱いまで、全般的に関わったが、この年は兄が木落としてメドに乗ることが決まっていたため、兄の足掛け綱（メドに乗る際に足場となる綱の調整）も担当した。平成 16 年度（35 歳）もまた中村区枠選出で針孔梃子係になったが、この年は川越しでメドに乗る大役を任された。しかし平成 22 年度（41 歳）には御柱祭の表舞台から引き、後方支援に回ることになった。SM 氏は平成 5 年から 10 年間所属していた消防団をすでに引退していたが、改めて消防部長に選挙で選ばれたため、御柱祭の



写真 5, 6 : 川越しの様子

——露払いの区旗が渡る（左）、御柱を対岸で待ち構える人々（右）——

警護に力を注ぐことになる。

③事務局に決まった経緯

平成 25 年に市職員の人事異動で、湖東コミュニティセンター所長に就任したことで、事務局を担当することになり、その後、御柱祭の準備の最初の段階から小宮祭²⁹に至る期間を通し、事務局を務めた。SM 氏は先の祭りの経歴にも記したように、御柱祭や、区の小宮祭にも積極的に関与してきた経験をもつ。したがって、湖東地区におけるローカルなネットワークも広く、事務局には適任であった。

コミュニティセンター所長には必ずしもその地区出身の人が就くとは限らず、御柱祭の経験やそれへの興味の有無が問われることもないのは前述の通りである。御柱祭は同じブロックの中であっても地区ごとにやり方や段取りは異なるので、他地区出身の事務局は、地区の人々とのコミュニケーションをとるのに苦勞することもある。実際、平成 22 年度の御柱祭では北山地区でそういうことが起こったため、その経験をふまえ、平成 28 年度は地区出身者をコミュニティセンター所長に任命してもらうよう市にかけ合ったという。茅野市では御柱祭に合わせて、支所と呼ばれるコミュニティセンターの所長には、平成 28 年度の祭りの際にはすべて地元出身が就いた。「わざとお祭りの時に合わせて地元出身を配置するように」したのであり、そこで

²⁹ 小宮とは諏訪地方を中心に点在する諏訪大社に關係の深い神社のことであるが、諏訪大社の御柱大祭が終わると、こうした小宮でも小宮祭と呼ばれる御柱祭が開催され、境内に 4 本の柱を建てる。一般に、区ごとに小宮をもっているが、小宮祭は区の氏子が老若男女問わず総出で行う、地域色が強い祭りである。小宮祭の事例研究としては以下を参照。飯田義明「平成 28 年諏訪大社式年造営御柱大祭後に開催される小宮祭における調査報告——上社湖東地区における須栗平を事例として——」『専修大学スポーツ研究所紀要』41 号、pp.21-33 (2018)。

選ばれたのが SM 氏であった。SM 氏曰く「事務局、(地区氏子会) 本部長、御柱の祭典本部 (の人) が (全く) いなくなっちゃうとどうなっているというのがわからないので、(今の周期で) 3 年ごとに代えていくと (いうことになった)。(祭りは) 6 年に 1 回ですので、6 年サイクルで回るので、3 年をずらしておかないと、肝心な時 (祭り本番時期) に事務局が代わってしまう」。したがって、SM 氏が任期を 4 年目まで延長すると、次の所長が 3 年の任期であれば、御柱の時期にかからずに任期を終え、さらに次の所長が御柱の時期に交替なく集中することができることになる。つまり「(SM 氏が) 平成 28 年まで担当し、29 年～31 年に新所長が就くと、(次の所長は) 平成 32、33、34 年 (の担当)、と来て、34 年の 4 月に御柱大祭を迎えることになる」。そうなれば、地域理解や地域経験を生かした御柱への貢献が期待できる、というわけである。

このように、平成 28 年度の御柱祭では、祭りが始まる直前でセンター所長の任期が切れることがないよう、平成 25 年にあらたに茅野市のコミュニティセンター所長に任命された人たちは、SM 氏のように、従来の「3 年任期」を延長させる特別措置がとられたのである³⁰。

④湖東地区における事務局の実質的な役割と SM 氏の行ったこと

a. 調整、記録

事務局の一般的な役割は、会議の連絡や準備、書記業務、そして決定事項の連絡といったものである。特に、日程をはじめとする様々な調整は重要な役割であるが、さらに SM 氏は「祭



写真 7：ビデオ片手に記録を取る事務局 SM 氏（一番右）

³⁰ 「退職所長」の時代から、コミュニティセンター所長の任期は原則 3 年であるが、新旧所長の交替日は必ず御柱年の 4 月 1 日であった。つまり、4 月第一週の週末から始まる山出しを目前に所長が代わり、事務局が交替するということであり、御柱祭は混乱を極めたこともあった。そのため、平成 25 年 4 月に就任した現役のコミュニティセンター所長に限り、3 年半に任期を延長する特別措置がとられている。つまり自動的に御柱祭の開催年までの任期となり、実質的に祭礼遂行のための重要なポジションを押さえることになる。

礼の記録」にも熱心に取り組んでいる。SM氏は平成28年度の御柱祭にビデオをもって参加し、その内容を録画し、記録として残すという作業を行った。かつては映像はもちろんのこと、文字にも残さず、口承のみであったことを考えると、これは次世代に祭礼を残そうとする創意的な作業であるといえる。記録は、慣習の維持にとっても新たな創出にとっても重要な事柄であったといえよう。

b. 会計

調整・記録という公的な要素に加えて、湖東地区の事務局の最大の特徴は、地区の御柱会計を全面的に引き受けている点である。同じブロックでも米沢地区では、2人の副大総代の片方の人が会計を担当している。湖東では伝統的にコミュニティセンター所長が会計を預かった方が公正な使い方ができるという考え方があり、その方針に乗っ取っている。このような点において、湖東の事務局はかなり踏み込みこんだ形で大総代を補佐している。

(3) 事例のまとめ：事務局による客観性と実質的運営

この事例から見えてくることは、大総代を中心とした祭礼としての「統合」に向けた実質的で確実な「運営」を行っていくための客観的な視点と判断材料の重要性についてである。まずSM氏は、市の職員であるという点で、すでに祭事に関わる人々とは一線を画した立場にあり、「そうであること」を周囲から期待され、自らも自覚した事務局ならではの役割をもっていた。それが祭礼に関わる「客観性」であり、会計を任されていることはその最たる例であった。しかし一方で、地域や祭りに対する“理解があること”も期待され、それについてもまた自ら自覚的であり、この事例では、御柱祭の経験と御柱への比較的深いアイデンティティをもったSM氏という人材が登用されていた。過去の地域や祭礼における経験知が、どのような立場からの祭礼参加者であれ大事であることを、湖東地区（ひいては茅野市全般）においては、そもそもがよく認識されていた。それが、“地域”および“地区”によるコミュニティセンター所長の「調整」（地元出身者であること）であった。その場合、地域において守らねばならないとされる慣習も、変えていかねばならない問題点や新たな創出の必要性も、客観的に把握される可能性が高まるのであり、そのことが祭礼の実践的な「運営」に反映され、「統合」を現実のものとしているようであった。湖東地区の大総代KT氏が評価する、事務局SM氏の個人的資質としての「事務能力の高さ」もさることながら、地域を理解した上での事務的作業的確さは祭礼運営の必要条件であり、「統合」に向けた最大の補佐となるのである。

3. 御柱祭における「運営と実行」の地域的慣習と創出

御柱祭を構成する三つのレベルの組織のうち、祭礼の現場で実際の作業を行うのは3のレベル [地区・区レベル：作業と実行] にある現場組織である。そしてこの現場を直接監督するのは「頭郷総代」であり、ここでは彼らの役割に焦点をあてる。上位にある2のレベル（三役会、代表頭郷総代会）で決定したことが、各地区・各区のなかにある現場組織にどのように反映され、運用、実行されていくのか、地域における慣習的、創出的特徴はどのようなものかを析出し、祭事運用のしくみを考察する。

3-1 頭郷総代の本来的役割

頭郷という役職は古くからあるが、元々は御柱祭のための役職というわけではなく、諏訪大社や、とりわけ小宮の祭事に対し、氏子が輪番でその費用や労役を負担し奉仕するものであった。氏子を代表する氏子総代の中の、さらに代表を務めるのが頭郷総代ということになる。小宮をもつ区は、原則、小宮の頭郷総代がいる。他地区では、富士見のように、小宮の頭郷総代が古くから区の祭事を仕切り、御柱祭においても大総代と同じような力をもつ事例も見られるが、米沢・湖東・北山ブロックでは長いこと、あまり目立つ存在ではなかった。湖東地区の中村区では、小宮である大星神社の頭郷総代が常時いるものの、笹原区では小宮の鹿狩神社の頭郷総代はおらず、通常は区の役員である総務が頭郷総代の役割を兼ねているし、須栗平区も氏子総代はいるが特に頭郷総代を置いていない。先にも記したように「御柱祭に向けた」頭郷総代を選出するようになったのは平成16年度であり、代表頭郷総代会を構成するなど、実質的に機能するようになったのは平成22年度のことであることからわかるように、「御柱祭頭郷総代」の歴史はまだ新しく創出されたものである。

頭郷総代の選び方は、各区に任されている。須栗平や中村のように、御柱年に氏子総代になる者の内の一人が頭郷総代になる場合は多いが³¹、一方で後述する事例の HT 氏の属する笹原のように、区長や氏子総代といった区の重職の経験者が新たに頭郷総代に選ばれることもあれば、北山地区の柏原区のように区長が頭郷総代を兼ねる場合もある。しかしながら、頭郷総代に課される責任が大きくなると誰にでも任せられるというものではなく、御柱祭を睨んだ人選がなされるようになってくる。

こうして各区選出の頭郷総代がそろったところで、今度はその中から代表頭郷総代として本

³¹ 須栗平には区の重職として、区長2名（行政区長と会計区長）の他に氏子総代が4名存在する。区長職が明けた2名は「古役（中氏子）」になり、その翌年「氏子総代（大氏子）」の任務をこなすが、大氏子2名の内の1名が、頭郷総代になる

部の役員になる者を決めなければならない。湖東の場合、上地域、中地域、下地域は各区選出の頭郷総代の中からそれぞれ1名ずつを代表頭郷総代とし、それらの人々を2のレベルの組織であるブロックの本部に送り込む。そして、既に説明したように、正副大総代と事務局、代表頭郷総代、総斧長を構成員とした代表頭郷総代会が本部に作られるのである（図2を再び参照のこと）。つまり、代表頭郷総代は2のレベルで決定した事柄を3のレベルに伝え、実行につなげていく橋渡しの役割をもっている。次にその頭郷総代の現場での役割を見ていくことにする。

3-2 現場の木と人を導く頭郷総代

では、祭事を進めて行く際に、実際に頭郷総代はどのようにその役割をこなすのであろうか、またどのような人がどのような経緯でその役割に就くのであろうか。聞き取り事例をもとにして考察を加える。

(1) 頭郷総代 HT 氏の事例（60代後半、会社員、男性）：平成28年度笹原区頭郷総代

①地域における経歴：地域との関わり方

湖東地区笹原区出身。1969年に高校を卒業した後、10年ほど地元企業のW製麺に勤務した。その間、配達先の調理場で見よう見まねで板前の勉強をし、その後独立して父親（のちに妻）と岡谷でそば屋を開店、10年ほど経営した。その後、（豊平地区の）「三井の森」にある山荘の管理人職（山荘利用者の受付から料理まですべてをマネジメントする）に就くが、10年ほどたった頃にバブルがはじけ、山荘所有者である大阪を本社とする会社が撤退し退職すると、茅野市内で土木関係の仕事を数年経験した後に、米沢地区にあるガソリンスタンドで平成18年頃から現在に至るまで勤務している。HT氏は転職しつつも地域の会社で合計30年ほど働いてきたことになる。これまで御柱祭の際には必ず6日間の休みを取ってきたが、地元の会社だけに理解もあり、休暇の取得もスムーズであった。また、山荘管理人の仕事をしていた時には御柱祭の期間中は祭りに力を注ぐために「食事なしの宿泊だけ」という条件で客の受け入れを行っていた。土木関係の会社では、御柱祭には欠かせない土木知識をもった従業員たちは皆休暇を取ったという。現在の勤務先は、地区は異なるものの、祭りの際には同じブロックになる米沢地区にあり、御柱祭時期の休暇に関しては言うまでもなく「寛容」である。

②御柱祭における経歴：これまでの御柱祭との関わり方

御柱祭には、昭和43年度（18歳）にメド乗りと曳き子として参加して以来、平成28年度の祭りまで欠かさずに参加してきた。「祭りは参加することに意義がある」という。昭和49年度（24歳）には、御柱に帯同してその進路方向の調整等を行う梶子方として参加し、この時もメ

ドに乗った。メドには同じ区の人ばかりが乗ってはいけないという理解があり、皆順番にメドに乗っていたが、独占しようとする人たちもいて、祭りの最中に区同士の小競り合いなどでもめることもあった。昭和 55 年度と 61 年度（30 歳と 36 歳）にも若手のポジションであるメド係として参加、当時は「こんなに乗っていいのか」という思うほどメドに乗っていたことができた。その後、平成 4 年度（42 歳）には、メド乗りの地区同士での競争が激しくなり、2 本ある前メド一本に湖東の者が、もう一本に米沢と北山の者が乗るというルールができたことを覚えている。平成 10 年度（48 歳）には、曳行の梶子係として御柱の方向転換作業等の「ご神木」に直接働きかける役割と同時に、区民をはじめとする参加者が綱をもったり曳いたりするのを促す役割を担った。平成 16 年度（54 歳）には、世話係として参加した。祭りの最中に参加する区民が食事のために集まることのできる場所を準備したり、集合させたりする仕事であった。平成 22 年度（60 歳）には、笹原区の 3 名の氏子総代の一人となった。根フジ採りや、綱打ちなど柱に関わる行事すべてに出席し、作業にあたってはそれに詳しい年配者たちにアドバイスを請うなどして進めた。そして平成 28 年度（66 歳）に 3 のレベルの現場を指揮する笹原区の頭郷総代頭として、さらには 2 のレベルと連動しつつ、3 のレベルとの仲介役となる湖東地区上地域から選出された代表頭郷総代として、御柱祭を迎えることとなった。

③頭郷総代に決まった経緯

②に示したように、平成 22 年に 60 歳で氏子総代となり、平成 25 年には任期 1 年の笹原区長となる。この任期の間に、湖東地区の大総代たちから区の頭郷総代を早めに決めておいて欲しい旨通達があり、区議会にもち帰ってかけたところ、HT 氏に白羽の矢が立ち、区長の任期を終えた直後の平成 26 年には御柱祭を見据え笹原区の頭郷総代となることが決定した。さらに、祭事の際には常に作業と一緒に行っていくことになる氏子総代 3 名は、HT 氏にとって非常に頼もしい人選となった。平成 27 年には、平成 28 年度御柱祭の湖東地区の代表頭郷総代 3 名のうちの一人として選ばれたのである。

④頭郷総代の御柱祭での役割、HT 氏の向き合い方

御柱祭前年の平成 27 年に米沢・湖東・北山ブロックの代表頭郷総代 11 名は祭事における責任を分担し、HT 氏は後ろメドの見張り係（曳行担当の相談役）となった。

a. 木を活かし、作業を伝える

フジヅル採りの指揮では、上地域の綱打ち当番地区として他の区よりも多くの参加者を出した。次の祭礼を担うであろう 30～40 代を中心とした若い氏子たちにも、色々覚えてもらう必要

があると考えたことから山梨まで参加してもらうことを決めた。当日は、神に祈りを捧げてから山中に入り、根フジの採り方をこと細かく教えた。「後世につないでいくように」そう思いながらフジヅル採りを行った（写真7、8）。



写真8：根フジ採りのために集まり、祈りを捧げる



写真9：根フジ採りの様子

上地域の当番地区となっていた綱打ちでは、過去の写真や記憶、また道具（ミツマタ）を借りた北山地区のやり方を参考にするなど熱心に勉強して作業に取り組んだ。綱打ちでは、世代を超えて皆で意見を言い合いながら作業を進めることができた。このような時に HT 氏は「御柱祭はいい祭りだな」と思うのである。

平成 28 年度の綱送り（元綱と二番綱を結ぶ）の作業は 50～60 代の人たちが中心になって行った。本当はなるべく若い人に任せかけたが、彼らは三地区共同の作業である木作り作業へ出払ってしまったために適わなかったのが残念であった。

b. 木を守り、人を守る

HT 氏は代表頭郷総代として、特に「曳行担当」の相談役の役割が割り当てられたわけだが、これは祭りの間「ひたすら御柱にはりついて」いる仕事である。時には斧の手伝いをすることもある。a に記述した準備作業でも見うけられるように、頭郷総代の仕事は木に直接関わる作業が中心ではあるが、「木を中心にして、人を配置して、（その）安全も保つ」役割も担っているという。例えば、山出し³²の際には、人が寄ってきて「木に悪ふざけ」をしないように「木を守り、見張る」役割がある一方で、参加する大勢の人たちが安全に曳くことができるように「整

³² 上社では4月第1週に3日間かけて行われる。切り出した柱が置かれた綱置き場から安国寺の御柱屋敷までの12～14キロの距離を曳行するが、穴山の犬曲、木落し、宮川の川越しなどの難所があり、それらをうまく切り抜けるのが見せ場である。

理」する役割もある。また、里曳き³³の際には、基本は曳行のしんがりにつくが、例えば建御柱を目前にした前宮入口の最後のカーブまでは最後尾につき、御柱が前宮の階段を上がったのを見届けたら今度は一番前に出て、待ち構え、氏子や観客にケガをさせないように気を配る。この時、気持ちの上では非常な「重圧」を感じている。そしてまた、後に続く御柱のために道をあけるなどの対応も行う。木と人の間を行ったり来たりするのである。



写真 10 : 山出し最中の HT 氏

c. 人を配置し、人を結ぶ

山出し、里曳きの際には、初めてマイクロバスによる一日複数回のピストン輸送を試みた。当日はこのマイクロバスを笹原区と祭りの現場を3回往復させ、祭事の役職者だけでなく、多



写真 11 : 翻る桃太郎旗（山出しの風景）



写真 12 : 翻る桃太郎旗（木落しの風景）

³³ 上社では5月第1週に3日間かけて行われる。山出しを終えた柱を一ヶ月安置した御柱屋敷から諏訪大社前宮と本宮までの2.4キロの距離を華やかに柱を曳行し、それぞれの境内に御柱を建てる。

くの区民ができるだけ気軽に参加できる環境を整えた。バスは大型経験のある人に運転を頼んで安全性を確保した。

また平成 28 年度にはじめて桃太郎旗を 5~6 枚製作し、氏子たちを誘導する旗印とした（写真 11, 12）。それまで参加する氏子たちは常にいる場所がバラバラで（集まりも悪く）見栄えも良くなかったため、なるべく皆が一つになって行動できるように工夫し、「(曳行中に) 何かあったら桃太郎旗に集まれ！」という参加者への了解を作った。HT 氏の印象に残っていることは、木落しの後、区民のために「チャーターしたバスに乗って帰る者は桃太郎旗に集合」としたところ、驚くほどあっという間に人が集まり、スムーズに帰ることができたことであった。

d. 神への奉納と感謝

HT 氏にとって御柱祭とは何か、とたずねてみた。「7 年に一度の楽しみである」というのが答えであったが、その楽しみとは、祭礼に携わることができて、御柱を曳くことができて、神に奉納ができることなのだという。しかし、それは個人的な満足を求めるものではない。氏子である区民や外から来た客人が楽しそうに喜んで御柱を「曳いてくれて」、お宮で建御柱をした後に、お宝投げに興じる人々の姿を見るのが何よりも嬉しいのだという。HT 氏の祭りでの役割と使命は、神に感謝しつつ奉仕し、そこに人が集まって一体化する時間と空間を作り出すことであるといえる。それは、祭礼の最も中心となる神である木のある現場を守り、集まる人々



写真 13：仮見立てされたご神木（のちの御柱）



写真 14：建御柱で御柱に組みつく氏子たち

の環境に配慮しながら楽しませつつ現場を動かしていくこと、なのであり、それが柱が実際に動き、建てられる「実行」へと結実するのである。

(2) 事例のまとめ：頭郷総代による具体的作業の実現

この事例から見い出せることはまず、頭郷総代が、ほとんど現場での実際の作業と、その段取りや指示を自らの仕事としていたことである。確かに HT 氏は、2 のレベルであるブロック本部の代表頭郷総代であり、統合と運営にも関わっているのであるが、その役割は本部で決定したことを、3 のレベルである地区・区の係の者や氏子たちに実行としての作業の実現を促すことでもあり、つまり 2 のレベルと 3 のレベルをつなぐ重要な役割を担っていた。湖東地区の大総代 KT 氏は、「御柱が好きだ」という理由だけで頭郷総代を選出することはできない、それだけでは（祭礼時の）区をまとめることはできない」と述べている。代表頭郷総代として大事なことは、統合・運営レベルで決まったことを区に戻った際に区民に“きちんと伝え、ものを言う”ことであり、そうでなければ、まとめていくことは難しいのである。

そして、祭礼時の地区の頭郷総代としての役割は、日常時の区行政を担う区長と連携しつつ、氏子である区民を“動かす”ことであり、事例でも HT 氏は、ご神体である「木」とそれを運ぶ「人」に常に寄り添い、帯同していた。木と人の双方に、直接的に、バランス良く関わる HT 氏の仕事には、常にこれらへの安全と感謝が配慮され、それを前提とした慣習の遵守と、一方で現場において創意工夫としての創出の知恵を絞る様子を確認することができた。そして、これらの目配りや配慮は、やはり長く欠かさずに祭りに関わってきた HT 氏の御柱祭の経験に裏づけられていた。

むすびにかえて

本稿では諏訪大社上社に属する湖東地区を中心に、御柱祭を構成している実体的な「組織」を三つのレベルに分類し、それぞれについての記述と考察を行うことによって、御柱祭はどのように成立するのかを明らかにしてきた。

まず、上社御柱祭大祭を催行するための三つのレベルの組織とは、以下のようなものであった。一つ目のレベルは、①上社地域のレベルであり、実際の組織としては上社地域全体を統括する「実行委員会」があった。ここで「統括と連携」の機能をつかさどるのは諏訪上社地域をまとめる 31 名の大総代たちであった。二つ目のレベルは、②ブロックのレベルであり、実際の曳行内容についての運営を決定する「各ブロックの本部組織」がこれに該当し、祭礼の遂行においては三役会と代表頭郷総代会が「統合と運営」の機能をもっていた。三つ目のレベルは、

③地区・区のレベルであり、これらは各地区・各区ごとに現場で組織され、それらはいくつもの役割に分けられていた。その「作業と実行」が遂行される現場を直接監督するのは、頭郷総代であった。

一見、形式的である御柱祭を構成する様々な実体的組織であるが、中にいる人たちの役割や機能、関係性がそれらをいかような形にも変えうる可能性を秘めていた。

そして、形式的な枠を越えて現れる地域協働には、実体的な組織にも、そして組織に属して祭りに奉仕し参加する個々人の中にも、これまで存続してきた伝統や慣例を守ろうとする慣習的な側面と、一方で次世代への存続を可能にしていくための新たな試みを行おうとする創出的な側面があった。これら組織同士や個々人同士の関係性が、当該地域それぞれの個性と多様性を生み出すことを、事例を手がかりに考察してきた。それを以下にまとめてみよう。

人々は、時に御柱祭の慣習的な側面において協働することによって地域的な“共同”を得るのであり、ここに伝統を守るという形で地域的まとまりが生み出され、伝統的な祭りを遂行していくことになる。そしてまた人々は、時に御柱祭の創出的な側面において協働することもあり、それによって地域的“共同”を得ることもある。これらは祭りの新たな境地を切り開くという形で地域的まとまりを見出し、新たな祭りのあり方を遂行していくことになる。しかし、時には御柱祭の慣習的な側面を支持する人々と、創出的な側面を支持する人々との間に、衝突や葛藤が生み出されることもある。特にその傾向は世代間と、地域間で見られることが今回の考察からはいえる。とはいえ、人々はこれまで地域的にも個人的にもそこでなんとか折り合いをつけようとしてきた。事例で見てきた大総代、事務局や頭郷総代たちは、彼らのかつての御柱祭での経験を生かしつつ、その見極めとコントロールをこなしていた。「祭りは生き物」と言った人がいた。まさに、慣習と創出の側面がせめぎ合いながら、祭りの姿や形を変える可能性を常に内包させつつ、またこの「慣習」と「創出」という祭事遂行の二側面が、祭礼のしくみに、——特に他地区と比較によってより明確に——地域の“個性”や“多様性”として現れるのである。

補 論（中洲・湖南ブロックの事例）

本論では、上社御柱大祭を催行するための組織について、米沢・湖東・北山ブロックを事例として、聞き取り調査をもとにして検討してきた。しかし、地区ごとの独自の慣習や歴史を大切に継承していく中で、組織の構成や役割はブロックごとに異なる。この補論では、比較検討の一資料を提示する目的で、中洲・湖南合同祭典委員会（以下、ブロック祭典委員会）の会議記録³⁴をもとに、平成 28 年度の中洲・湖南ブロックの組織のあり方を簡単に説明するが、その際、平成 22 年度からの変化にも着目する³⁵。

中洲・湖南ブロックは諏訪大社本宮のある平野部、いわゆる「里」に位置し、八ヶ岳山麓の米沢・湖東・北山ブロックとは地域の発展経緯も大きく異なる。世帯数は、米沢・湖東・北山ブロックには 3,829 世帯あるのに対し³⁶、中洲・湖南ブロックには 5,808 世帯で³⁷、約 1.5 倍の規模である。諏訪大社本宮と御柱街道が立地する中洲・湖南地区は、諏訪大社との密接な関わりがある。とりわけ里曳きの 3 日間は、中洲・湖南地区が御柱祭のメイン舞台となることもあり、御柱祭に対する思いもことのほか強く、神事や伝統的祭事に関しては厳格に対応している。また、このブロックには、中洲地区の中金子区が「御柱休め」や「根固め」を古くから担当するなど、御柱祭において特別な役割をもつ区もある³⁸。

ブロック祭典委員会は、平成 22 年度以来、御柱曳行中の本部役員の役割、および役員の配置場所を書面におこし、職務の明文化と徹底を図っているが、その内容は米沢・湖東・北山ブロックとは明らかに異なる。

- 1) 総ての祭典委員は、「安全第一」「円滑な曳行」「氏子が気持ちよく参加できるように」に目配り、気配りをする。
- 2) 総ての祭典委員は、それぞれの担当持ち場を離れないこと。持ち場を離れる場合は、直属の長に連絡し、常時連絡が取れること。
- 3) 総ての祭典委員は、飲酒を厳に慎み、御柱や綱に座り込んでの飲酒や喫煙を禁ずる。
- 4) 緊急事態でない要望及び苦情は、直属の長を通じて組織図にのっとって行う。
- 5) 笛（ホイッスル）の使用については、祭典本部の決めた役員のみとする。

（平成二十八丙申年諏訪大社御柱祭会議記録より抜粋）

³⁴ 湖南中洲合同祭典委員会『平成二十二庚寅年 諏訪大社御柱祭 会議記録』（2010 年 8 月）湖南中洲合同祭典委員会『平成二十八丙申年 諏訪大社御柱祭 会議記録』（2016 年 8 月）。

³⁵ 平成 22 年度は湖南、平成 28 年度は中洲が当番地区のため、正確には、平成 22 年度は湖南・中洲合同祭典委員会、平成 28 年度は中洲・湖南合同祭典委員会と呼ばれるが、本稿では平成 28 年度に合わせ、中洲・湖南と表記を統一する。

³⁶ 内訳は、米沢 1,070 世帯、湖東 993 世帯、北山 1,766 世帯である。

³⁷ 内訳は、湖南 2,166 世帯、中洲 3,642 世帯である。

³⁸ 「御柱休め」とは、前回建てられた「古御柱」を「普通の木」に戻す神事のことで、本宮と前宮、合わせて 8 本の古御柱を倒すものである。一方「根固め」とは、新しい御柱が建てられた後に、その根元を突き固める儀式である。御柱休め、根固めともに、中金子区の小宮である八龍神社の氏子が古くからこの儀式を担ってきた。

名実ともに御柱祭を牽引する中心的存在は現職の大総代である。大総代は諏訪大社及び関係方面との打合せ事項等が決定次第、ブロック祭典本部会議を招集し速やかに報告することにより会議を円滑化に進めることが、第一の業務である。そして、御柱曳行時においても関係者との連絡を緊密に取り合い、安全第一を目標とし、不測の事態が生じた場合は、本部長とともに速やかに終息に努める。

中洲・湖南合わせて5名の大総代は正副ブロック祭典委員長として御柱祭を仕切っている。ブロック祭典委員長には、中洲・湖南の大総代が1名ずつ、計2名が選出されており、救護(中洲2名、湖南1名)や事務局(中洲4名、湖南2名)がその管轄下に置かれている。事務局は、会議、打合せ等の連絡、準備及び事務処理に加え、各係の長までの本部役員への通知・連絡を担当し、祭典委員長を補佐する。裏方に徹しているが、御柱祭に関わる一連のプロセスを全て把握し、セクション間の潤滑油の役割をしている。

ブロック祭典副委員長には、大総代3名(中洲2名、湖南1名)が就く。祭典副委員長の内1名は、御柱祭に関わる予算から費用に至る一切の会計処理や手配を行う統括をするが、それを支えるのが会計役と、会計処理を監査する監事である。その他の祭典副委員長は、各種会議や打ち合わせの議事録をつける書記や曳行記録・写真を残す記録係と連携をする。

これら正副ブロック祭典委員長の下には、現場の総指揮をとる本部長、本部長代行が置かれている。これらは、大総代を補佐し本部会議・事前打合せの会議、曳行当日の打合せや会議等を招集し、議長を務め意見を集約して関係者への連絡などを行うなど、大総代と各セクションとの緩衝材の役割を担っている。

しかし、御柱の曳行・建立の現場で最も力をもっているのは斧長である。御柱祭の現場での経験を豊富にもっている斧長は、御柱の木造り及び曳行開始から曳きつけまでの統括責任者であり、曳行中は全ての役員・氏子はその指示に従わなければならない。すなわち、中洲・湖南ブロックでは斧長が実質的な現場での指揮権を有しており、大総代と並び御柱祭を成功へ導くための両輪ともいえる。斧長は、柱と、それとつながる元綱に関わるセクションをすべて統括している。したがって、木作りを担当する斧取や鋸係だけでなく、元綱係や追掛綱係をまとめる元綱長と追掛長にも直接的な指示を与える。しかし、主に若者が担当する梶子や鼓笛隊に関しては、後述の若者総代を通して統率する。現場で一番の権威をもつ斧長からの直接的な指示を受けるよりも、同年代の若者から信任を得た、若手氏子にとっては距離感の近い若者総代を通じた方がまとまりやすいからであろう。

現場におけるもう一つの重要な役職は曳行長である。曳行長とは主に二番綱よりも先の場所で曳行に加わる大勢の「一般曳き子」や観客たちが安全かつ楽しく参加できるよう、目配りをする係である。中洲の曳行長は概ね二番綱付近、湖南の曳行長は概ね四番綱付近に張りつき、

二番綱から先綱⁴⁰までを巡回し円滑な曳行を目指す⁴¹。したがって、斧長の指示の下で、副本部長（各区長）、木遣隊、山吹隊との連絡を密接に行い、一般氏子への曳行の指示をし、警備、消防団とも連絡を取り、氏子たちの安全管理を担っており、曳行現場における各係の調節役と言える。また、先綱を先導する旗もち⁴²が前の御柱の後部に近づきすぎないように注意し、衝突や揉めごとが起きないようにしている。昭和 37 年度の協定で御柱祭における各ブロック間の追い越しは禁止されたが、その後も追い越しの小競り合いはしばしば起きており、実際、平成 28 年度の御柱祭でも筆者の目の前で小競り合いがあった⁴³。もちろん、各ブロックの若者たちも喧嘩がご法度なのは重々承知をしているが、得てして若者たちのエネルギーは一つ間違えると思いがけない衝突を引き起こしてしまう可能性は常々ある。そのようなところにも、曳行長は目を配らなければならないのである。



写真 15：突っかけのパフォーマンス

写真 16：曳行路の清掃、片づけをする若手氏子たち

本部役員の中で注目すべき役職として、最後に若者総代について触れたい。若者総代は、若者・梶子長・山吹隊を統括し、斧長の指示の下、円滑な曳行となるための協力をする重責を担うが、若者をコントロールするには各地区における若者からの信頼が厚くなくてはならない。

⁴⁰ 先綱とは曳行の先頭に行く綱のことである。曳き子が多いブロックほど、綱の本数も多くなり、四番綱や五番綱が先綱になるところもある。

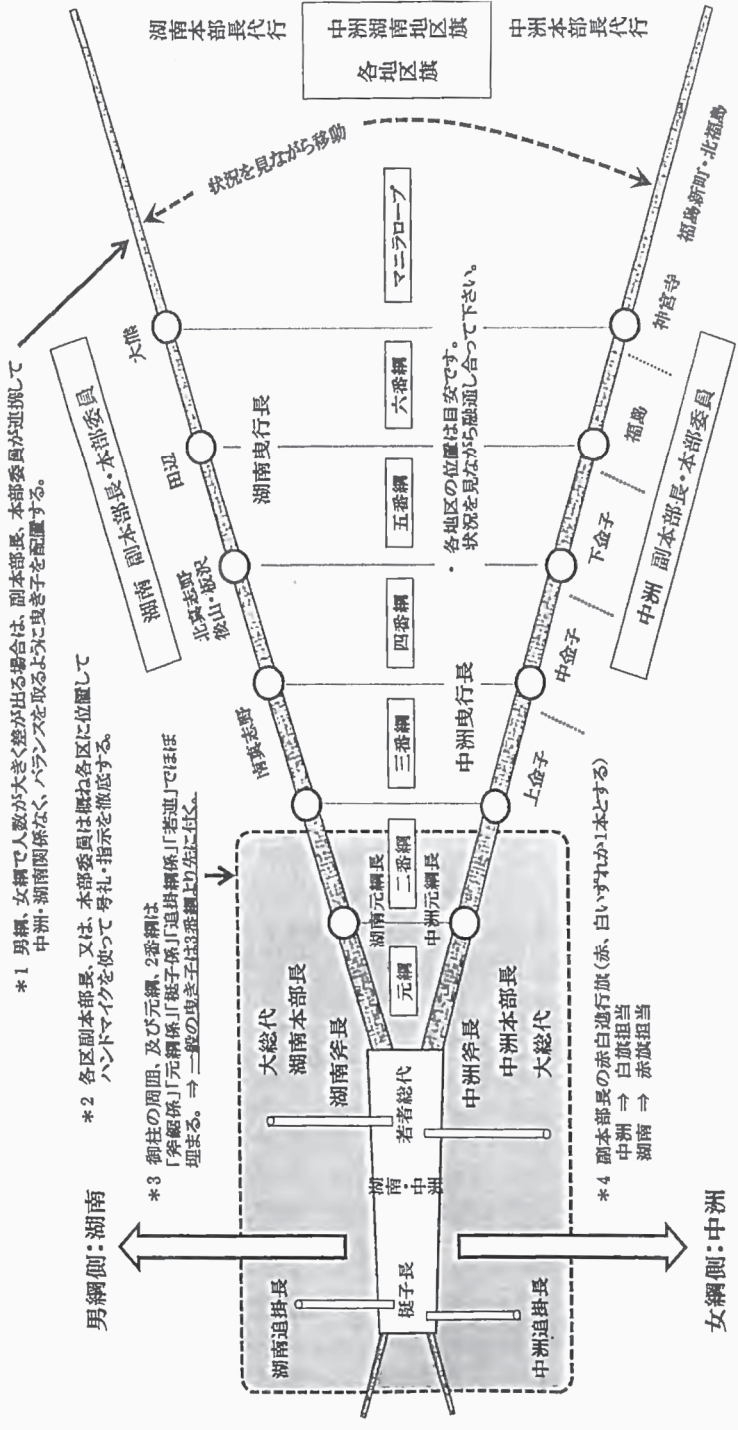
⁴¹ 曳行長のみでなく、図 4 のようにすべての役員の曳行時の配置が決められている。

⁴² 旗もちとは、各区の顔である区旗をもつ重要な役割である。曳行中は先綱よりも前に出て柱を先導する。

⁴³ 曳行は本宮一の柱、前宮一の柱、本宮二の柱、前宮二の柱・・・と太い柱から順に曳行するが、後から追いかける細い柱の方が前の柱に追いつき、早く動くように圧力をかけたり、時には追い越そうと、ブロック間で一触即発の状態になる。かつては、梶子衆が梶子棒を地面に打ち鳴らし、前の柱に対し早く進めと煽り、本気で攻防戦をくりひろげる「突っかけ」がしばしば起きたが、今は一種のパフォーマンスで行われることも多い（写真 15）。

平成28年 4月 12日
中洲・湖南祭典本部

里曳き一日目 御柱曳行役員配置



*1 男綱、女綱で人数が大きく差が出る場合は、副本部長、本部委員が連携して中洲・湖南関係なく、バランスを取るようご留意ください。

*2 各区副本部長、又は、本部委員は概ね各区に位置してハンドマイクを使って専ら、指示を徹底する。

*3 御柱の周囲、及び元綱、2番綱は「牽懸係」「元綱係」「紐子係」「追掛係」「若連」でほぼ埋まる。⇒ 二鞭の曳き子は3番綱より先に付く。

*4 副本部長の赤白進行旗(赤、白いずれか1本とする)
中洲 ⇒ 白旗担当
湖南 ⇒ 赤旗担当

図 4： 柱曳行役員配置図 (里曳き一日目)

* 出典：「平成二十八丙申年 諏訪大社御柱祭典記録」

また、若者総代は将来の御柱祭における斧長やその他重責を担う候補者とも捉えられている。若者総代が率いる若い氏子集団は、メドや柱を動かすだけでなく、曳行時の沿道の清掃や片づけも積極的に行う（写真 16）。この作業は今ではほとんどのブロックが行っているものであるが、中洲・湖南ブロックの若者は若者組織設立当初から他ブロックに先駆けて行い、今に受け継がれてきたようである。

湖南・中洲ブロックは、上社地域の中でも最も慣習を重視するブロックの一つだといわれているが、時代の流れに応じて変化は見られる。まず、組織の変化から見てみよう。平成 28 年度には若者をまとめる組織の一部に変更が加えられた。平成 22 年度までは若者本部が斧長の下に位置づけられていたが、平成 28 年度には若者総代を任命し、その下に若者本部を置くようになった。これは斧長からの指示が分散することなく若者総代一人に伝えられることと、若者総代を中心として若者たちのまとまりをより強める意図があったと思われる。さらに、山吹隊と呼ばれる鼓笛隊の位置づけにも大きな変更があった。この鼓笛隊は平成 22 年度に結成されたが、当初は指示体系がはっきりせず、若者本部役員と梶子長と曳行長いずれもの指示を受けるような位置づけにあった。しかし平成 28 年度には、鼓笛隊は若者総代の下に、梶子長や若者本部と並列して置かれるようになった。

女性の御柱祭への参加に関して非常に保守的な中洲・湖南ブロックであるが、これに関しても少しずつ変化が見られる。他地域ではすでに女性のメド乗りも出現しており、最初の事例は平成 16 年度の下社の建御柱であった。一方、上社でも平成 28 年度の山出しで米沢・湖東・北山ブロックの 2 人の女性がメドに乗り話題になった。そのうちの一人は短い距離ではあったが、メドの最先端に堂々と乗ったのである（写真 17）。こうした「革新的」なブロックとは対照的に、中洲・湖南ブロックは現在も頑なに女性が御柱に乗ったり触ったり、ましてやメドに乗るなどの行為は禁じている。しかしそのような中洲・湖南地区でも、ラップ隊や鼓笛隊を組織し



写真 17：メドの一番上に乗る女性氏子（米沢・湖東・北山ブロック）

女性の参加も歓迎する全般的な流れには逆らえず、木遣り隊はもちろん、山吹隊への参加も認めており、女性メンバーは年々増え続けている。

このような組織の変化や、鼓笛隊を通じた御柱祭の女性への開放の例を見ても、中洲・湖南ブロックは伝統的な枠組みに縛られすぎているわけではなく、歩みは遅いかもしれないが、新たな創出的試みは起きているといえる。

本稿は、平成 28 年度御柱祭のための準備段階から本番終了までの間、(湖東地区を中心に)筆者たちが参与観察の形で参加させていただいた作業や会議、直会等での見聞と、折りに触れて実施した関係者への聞き取り調査(現在のところ総数 20 名程度)、そして収集した地域関係資料の内容にもとづいて執筆を行ったものである。今回は特に、執筆にあたって KT 氏、SM 氏、HT 氏への重ねての聞き取り調査を行い、情報を提供していただいた。今後、さらにこれまでの聞き取り内容を整理しつつ、祭礼についての考察を重ねて行く予定であるが、まずはなにより、私たちが快く受け入れて下さり、様々なお話を率直に語って下さった多くの御柱祭関係者のすべての方々に、この場を借りて深く御礼申し上げたいと思う。本当にありがとうございました。